

2018. 10. 28. 聖霊降臨節第24主日礼拝式説教

ダビデ王物語講解説教

聖書：サムエル記下7章1-29節

『神の家をたてる』

感謝するということを形に表すことは簡単なようで、とても難しいことです。例えば、誰かにとてもお世話になった時、自分のために深く心を寄せてくれたとき、どうやって感謝の思いを表すか、苦慮したという経験があるのではないのでしょうか。

感謝の気持ちがないとか、忘れていた、という話ではなく、感謝の気持ちはいっぱいにある。だけれどもそれをどう表したらいいのか、そのことで苦労するということは、少なくないのです。

感謝というのは、相手があることですから、相手によって感謝の表し方も変わってくるのは当然です。友人に対する感謝と、自分よりも年長の方からの恩に対する感謝とでは、感謝の思いの表し方が変わってくるのは、自然なことです。

感謝ということを振り返ると、あの時、あの人に対して、あれで十分な感謝の思いを伝えていただろうか、という悔いや反省が残っている、ということは誰でも経験していることでしょう。例えば親の愛に対して、十分感謝の思いを表してきたか、と思うと、感謝の気持ちが十分にあったとしても、それを表すことの難しさを感じるのです。

感謝の相手が神さまの場合、わたしたちはいったいどんな感謝の表し方をしたらいいのでしょうか。

ダビデは統一されたイスラエルの王さまになり、美しい王宮に暮らすようになりました。国の中も安定してきたその時、ダビデは自分はこんな王宮に住み、神の箱は天幕の中だ、ということに改めて気づき、彼は神のための家、後に呼ばれる神殿をつくることを思い立ちました。そこには当然、神にたいするダビデの深い感謝の思いがあったと思います。ダビデはすぐに信頼を置く預言者ナタンにそのことを話しました。ナタンもまたすぐに賛成しました。ところがその夜、ナタンに主の言葉が臨みました。

神さまはダビデに対して、「あなたがわたしのために住むべき家をたてようというのか。」と言われ、わたしはイスラエルをエジプトから導き上ったその時

から、今日にいたるまで一つ家に住むなどということはなく、ずっと天幕（テントのようなもの）で歩んできた。わたしはあなた方とともに常に一緒に歩んできた。そしてわたしはあなたに王宮と同じような高価なレバノン杉の住まいを要求したことがあるか。そう言われたのです。ダビデは自分が立派な王宮で暮らし始め、安定した生活の中で、神への感謝を忘れることなく、神の家、神殿をたて、神への感謝を表そうとしました。世には神さまへの感謝を忘れて何もしない人もいるのに、ダビデの態度は見上げたものです。しかし神さまはそのダビデの感謝の思いのあらわれを受け入れはしなかった。受け入れるどころか、そのようなものをいつわたしが要求したか、と言われたのです。

どうして神さまはダビデの感謝のあらわれを受け入れなかったのか、という前に感謝ということをもう一度考えておきたいのです。

人間同士の関係でも、感謝の気持ちを表したけれど、相手は本当はこんなこととしてほしかったわけではない、ということはあるでしょう。つまり感謝、ということの根底には相手の気持ちとか、思い、どう受けとめているかということと、相手と自分との関係をどう受け取っているか、ということがあるのです。

確かにダビデは、自分の感謝の意を具体的な形で表そうとした。表そうとしたことは、貴いことだけれど、神さまの思いをダビデは聞き取り、受けとめようとしていたか。神と自分との関係を受けとめていたか、つまり神さまからの恵みとか導きというものを受けとめていたか。ダビデは神さまの恵みをわかっていると思っていただけで、本当にはわかっていなかった、ということなのではないでしょうか。

神さまはもう一度あらためて、ダビデに対して、恵みの言葉を語ります。わたしがあなたを羊の牧者からイスラエルの指導者とした。あなたがどこに行こうともわたしは共にいる。あなたに安らぎを与える。そしてわたしがあなたのために家を興す。つまりダビデ王朝を確立する、というのです。ダビデの王朝はとこしえに堅く立てられる、そう預言者ナタンは神の言葉をダビデに語ったのです。

ダビデはこのナタンからの神さまの言葉に聞き、御前に出て座し、祈るのです。この祈りは、サムエル記の中でもとりわけ重要なダビデの神さまへの応答の祈りです。

ダビデは神の言葉を聞いて、あらためて率直に驚くのです。神さま、なぜわたしのようなものを選び、ダビデの王朝をたててくださるのですか。しかしそのことすらも神さまの目からは小さなこと。あなたは遠い将来にかかわること

までお語りくださいました。ダビデはそのことに驚くのです。神さまの恵みの深さ長さは自分の考えや思慮を超えている。神さまあなたはあなたの僕を知ってくださっておられる。神さまはわたしのことをわたしもよりも深く、確かに知ってくださっておられる、ダビデはそのことに驚き、思い知らされる。ダビデはこれまでの神の恵みを感謝して、神の家・神殿をたてようとなりました。

それは、ダビデが自分で考えた感謝の表し方でした。だが、今こうして改めて神の選び、恵み、導き、つまり神の思いを聞くにつけ、自分と神との関係において神殿を作るという感謝の表しよりももっと重要なことは、この神の思いに心底聞き続けること、神の言葉に全力で聞くことそのものが神への感謝の応答だったのではないか、ということに気づき始めたのです。

善意の押し売りという言葉があります。ネットでこんなことを書いている人がいました。友人がタイに旅行に行ったとき、お土産にティッシュの箱ぐらいの大きさの鳥の木彫りを持ってきた、だけどその人は何でも言える間柄だったので、これはいらない、と友人に言った。普通の関係ならとても言えないけれど、考えてみると、まったくいらないものをお土産としてもらって、例えば苦勞してきて買って来たんだ、というような気持ちを盛られても困る、とその人は書いているのです。せっかく買って来たお土産に感謝しないなんてけしからん、という思いの人はそもそも土産物を買ってこない方がいい、とまで言うのです。自分が買って来たお土産で相手が感謝することを期待するのは、まさしく善意の押し売りだ、というのです。自分の気持ちが優先している、と。

確かに、ダビデは神さまにお礼の気持ちを込めて、感謝の気持ちを形にして、神殿を作ると言い出した。だがそれは善意の押し売りかもしれない。ダビデは神の言葉を聞いて、そのことに気がついたのでしょうか。

そして、同時に、感謝の気持ちを形すること以上に大事なことに気づいたのだ、と思います。それは、神殿を作るという自分の思いではなく、神の思いをこれまで以上に確かに受けとめていくこと、神の救いの意志を受け入れていくこと。わたしが神に感謝の意を形にして表すこと以上に、神のみ心を信じて受け入れていくことそのものが、神の恵みに対する応答なのだ、ということです。

ダビデはこの祈りの中で、主なる神よ、あなたはまことに大いなる方、と呼びかけて、その神さまのなさる業を語ります。あなたはイスラエルの贖ってこられた、と。エジプトで囚われていたイスラエルの民を解放し、脱出させてくださり、わたしたちを買い戻してくださった。そしてわたしたちの神であり続けてくださる、と。

ダビデはこの祈りの中で、神さまのなさってこられた業をもう一度あらためて受けとめて、再確認している。つまり神さまの意志を受けなおしている。信仰というのは、すなわち、そういうことです。わたしたちの歩みの中で、神の救いの業を、贖いの業を、受け取りなおす。もう一度新たに受けなおすのです。それを何度でも繰り返していくのです。それが神ご自身の求めるところなのです。

そのことを繰り返すことそれ自身が神への最も深い感謝なのだ、ということです。もちろんわたしたちの神への感謝は形をとって現れることも、あらわしていくことも当然あります。しかし相手の思いぬきの、相手との関係ぬきの感謝は自己満足に終わるのではないか。ダビデという人は、普通にまちがいをしでかす人でした。しかし、まちがいをおかしてそこで語られる神の言葉に聞くことのできる人でした。そして自分に善意に固執することなく、神の思いの前で自分の神殿をたてるという思いに固執することなく、神の思いを受けとめ、神の思いにさらに豊かに聞いていく人でした。主なる神よ、あなたは神、あなたのみ言葉は信実です、そう信じて歩いていける人でした。神が求めておられることを受けとめ、それが感謝なのだということを知っていく人でした。わたしたちもダビデに続くものでありたい、と思います。

D a t a : 聖霊降臨節第23主日礼拝式説教

讃美：前456、後459

新生教会礼拝堂